

F—19 農家生活の変貌に関する研究(第3報)
—(その1)集落の世帯構成についての
地域別考察—

青葉学園短大 ○鹿股寿美江
菊池 公子

1. 1970年4月の時点における集落の世帯構成の現状をあきらかにし、農家生活の展望になんらかの示唆をうることを目的とした。

2. 研究対象はつぎの三地区の集落を選定した。A. 秋田県仙北郡仙北村上高梨集落53戸、B. 石川県石川郡松任町北安田集落92戸、C. 広島県賀茂郡大和町神田地区萩原集落、101戸。集落選定の理由—(1) A, B, C はいずれも農業圏として考えられている地域である。Aは、農地解放前は大地主と小作というタテの序列のきびしい集落構造で、本家、分家の関係は、日常生活の中で持続している面が大きい。戦後に分家した戸数は、三地区の

うちもっとも多い。人口は、35年～40年にかけて減少しているが、世帯数は増加している。Bは、人口が増加し、田園都市的色彩がつよく、中堅層農家が大半をしめている。Cは、山間村落で20台の人口流出がはげしい。以上のように特性をもった地区を選定した。世帯構成は、4つに分類して、考察を行った。

3. 直系家族的世帯の率がもっとも高いのはBの2ha以上の階層、第2位がAの2ha以上の階層、A・Bともこの階層は農業後継者がある。核家族世帯の率の高いのは、Cの1ha未満の階層、なお、老夫婦のケースが目立つ。単独世帯(孤老世帯)はCにおいて13%をしめ山間村落の世帯構成上の問題を端的に示している。